
ポケスぺの世界へ

零戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケスペの世界へ

【Nコード】

N7844X

【作者名】

零戦

【あらすじ】

大阪の普通の高校生やった俺 冬月将は目を覚ますと、ベッドの中にピカチュウがいた。

そしてそこはポケモンの世界やった。

これはゲームとポケスペを織り交ぜています。

ゲーム三割、ポケスペ七割といったところだと思います。

不定期更新です。

第一話（前書き）

ポケスペとゲーム（リメイク版じゃない）をしていたらつい書いてしまった。

第一話

……何故か朝起きたら隣にピカチュウがいた。(核爆)

「どゆこと？」

とりあえず、起きる。

どうやら俺はベッドで寝てたみたいや。

あ、自己紹介が遅れたな。

俺は冬月将で、普通の大阪の高三や。

バイト終わって、メシ食って寝たはずなんやけどな……。

辺りを見渡すと、本棚を見つけた。

………本棚の本はほとんどがポケモンに関する本やな。

てことは………此処はポケモンの世界か？

ピカチュウがベッドで寝てるしな。

「シヨウ〜、ピカ〜。ご飯よ〜」

階段から母さんの声が聞こえる。

この世界の母さんは母さんやねんな。(意味分からん)

「…ピカ？」

母さんの声にベッドで寝てたピカチュウが目を覚ました。

「……ピカ？」

あ、俺見て唾然としとるな。雰囲気とかで分かるんやろな。

「……とりあえずメシ食べるか」

俺はピカチュウに言うと、ピカチュウは俺の頭に乗っかる。

俺は階段を降りる。

階段を降りると前の世界にもいた母さんがいた。

「おはよう。ご飯出来てるわよ」

「うん」

俺はご飯を食べる。

ピカチュウも用意されたご飯を食べ始める。

「あら？将もこの世界に来たの？」

「ブウウッ!? (。。(」

……まさか……。

「そゆこと。私も寝てたらこうなってたの。将より一週間も早くこの世界に来たのよ。理由は分からないけどね。まさか本当にポケモンの世界があるなんてね」

母さんが笑う。

そっぴや母さんはポケモンピンボールやクリスタルとかにかなりはまっていたな。

「とりあえず、イシツブテとロコン、ポッポ、メリープ、マリルを捕まえたわ」

「早ッ!! (。。(」

てかマリルで滅多に出ないポケモンやで？

「たまたまスリバチ山に行ったら出てきたのよ」

……あんた凄いわ……。

「てか、よう俺やて分かったな」

「私にあんたの母親だよ」

……納得。

「あ、そついやウツギ博士が呼んでたよ」

「ふうん……てここワカバタウンッ!？」

「そうよ。ついでに言うとりメイクのソウルシルバーとかじゃなく
て旧作の金銀・クリスタルみたいよ」

「旧作の金銀・クリスタルッ!？イヤッフーツ!！」

俺は思わず叫んだ。

だって旧作の金銀・クリスタルは俺にとっては青春やで。

小学生の時によつたわ……。

それに正直最近のは特性とかあるからあんま好きちゃうからな。

ディグタのありじごくから逃げられへんてのどついう事やねん。

「てことは、俺が主人公？」

「主人公は私がこの世界に来た時に出発したわよ」

「んじゃ何で俺？」

「それはウツギ博士に聞きなさいよ」

……へえへえ。

とりあえずメシを食ってウツギ博士の研究所に行った。

ウツギ研究所

「いらつしやいシヨウ君」

研究所に入るとウツギ博士が出迎えてくれた。

「どないしたんですか？」

「実はね……………」

簡単に言うと、オーキド博士が新しくポケモン図鑑を持ってくれたから俺も図鑑を完成させてほしいらしい。

「ポケモンはピカチュウだけだと心細いと思うから残っているヒノアラシを君にあげるよ」

「はあ……………」

てか図鑑あつたんやな。

ウツギ博士によると主人公はヒノアラシ、強奪されたのはワニノコらしい。(俺がもらったヒノアラシはウツギ博士が腰を痛めた際、気分転換に外へ出たら草むらにおっいたらしい)

その後、研究員からモンスターボールとキズぐすりを貰って家に戻った。

……そういやモンスターボールでユーチューブのサイトで言うてたな。

人身販売やら窃盗やらどうやって大量生産してるのとか……。

自宅

「……という訳やねん」

「ふうん……まあ頑張りなさいよ」

……あっけらかんやなあ。

「ポケモンと旅が出来るのだからいいじゃないの」

まあそらそうやけどな。

「お金は貯金しといてあげるからね」

へえへえ。

「んじゃま行ってくるわ」

「行ってらっしゃい。ポケギアは持つてるんやからたまに電話しなさいよ。後、伝説ポケモン捕まえたら私にも見せてね。必ずよ」

「はいよ」

俺は準備をして母さんと別れの挨拶を交わして家を出た。

とりあえず、俺のママチャリの前カゴにピカとヒノアラシを乗せて出発した。

目指すはヨシノシティだな。

第一話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第二話（前書き）

この作品はポケスペの金銀・クリスタルから始めています。

第二話

「ようやくヨシノシティに着いたな……」

俺達は三時間かけてヨシノシティに着いた。

三時間もかかったんは、ワカバタウンとヨシノシティの間にある29番道路でピカチュウとヒノアラシのレベル上げをしていたんな。

今のレベルはピカチュウレベル12、ヒノアラシレベル12に上げている。

「とりあえずポケモンセンターで休息するか」

二匹をボールに戻してジョーイさんに預ける。

「ふう〜」

俺はポカリを買って一息いれる。

「……何で29番道路にイトマルやゴローンとかおんのや？」

俺はそう呟いた。

29番道路にはポツポ、オタチ、コラッタ、夜にはホーホーが出るはずなのに、イトマルやゴローン、イワーク、プリンとかもいてんな。

「……まさか、金魚クリスタルやけどポケスペか？」

ポケスペは草むらに入ったら色んなポケモン出てくるからな。

「……まさかな……」

あの漫画は面白いけどな。アニメ化してほしい作品やし。

「まあ、ポケスペでも俺は関わらんとこかな」

そこら辺は主人公達に任すわ。

「シヨウさん。回復は終了しましたよ」

ジョーイさんが言うてくる。

「あざーす」

俺は二匹を受けとってポケモンセンターを出た。

「さて、時間は昼の1時か。メシはさっきお握り食べたし、このままキキョウシティに行くか」

二匹もボールの中で頷いた。

「キズぐすり買って30、31番道路に行くか」

俺はチャリに乗ってヨシノシティを出た。

31 番道路

「ヒノアラシ”ひのこ”ヤッ!」

ヒノアラシのひのこがむしとり少年のキャタピーに直撃してキャタピーが倒れた。

「僕の負けだ。はい、賞金の500円だよ」

「まいど」

俺はむしとり少年から500円を受け取る。

「もう夜やな。キキヨウシティにちゃっちやと行くか」

ポケギアで時刻を見ると、夜7時を指していた。

俺はゲートを通ってキキヨウシティのポケモンセンターに入った。

「お願いします」

「はい」

俺は四つのボールをジョーイさんに渡す。

ん？増えてないかやて？

あれからバタフリー、ピジョンを捕まえてんな。

「ん？」

ソファーに座っていると、ポケモン雑誌を見つけた。

「……………ん？」

十一歳でポケモンリーグチャンピオンになったマサラタウン出身のレッドの写真があった。

……………ポケスぺのレッドやった。

「……………ポケスぺかあゝ」

俺はソファーに寝転がる。

まあエリカやナツメ、カンナおるからええけどな。

三人好きやからなあ。多分エリカファンの奴は絶対に多いな。

「シヨウさん、終わりましたよ」

「はいはい」

俺はボールを受け取る。

「さて、マダツボミの塔でゴース捕まえてから寝るか」

俺達はマダツボミの塔に向かった。

マダツボミの塔内

何故か所々、壊れているところがあったけどゴールドとシルバールの仕業やな。

「ん？」

……何故か、マダツボミの塔はゴースが出るはずなのにゲンガーが出た。

「まあええや、ポケスぺの世界やしな。ピカチュウ、”でんじは”ッ！！」

ピカチュウが”でんじは”でゲンガーの動きを麻痺させる。

「”電気ショック”やッ！！」

そして”電気ショック”でゲンガーの体力を減らす。

「今やッ！！」

俺はモンスターボールをゲンガーに向けて投げた。

ボムンツ！！

「よし、捕まえたな」

無抵抗しなくなったボールを拾い上げる。

「さて、後は秘伝マシンのフラッシュを貰っただけやな」

「相手はマダツボミだけやからヒノアラシとピジョンで充分やからな」

「ぬう、僕の負けじゃ。約束通り秘伝マシンのフラッシュをあげよう」

まあ余裕でマダツボミを倒した。

そして、あなぬけのヒモを使ってマダツボミの塔を脱出した。

時刻は夜の9時か……。

「ポケモンセンターに泊まるか」

俺はチャリでポケモンセンターに向かって、皆と一緒に遅めの晩飯を食べる。（豚生姜定食）

ちなみに、ポケモンセンターではトレーナーのために寝食はタダらしい。

「ふう、食った食った。風呂に入って寝るか」

俺達は風呂に入って着替えて布団に潜り込んだ。

明日はジム戦やな……。

第二話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第三話（前書き）

タイトル変えました。

バトルはゲームと同じにしています。

第三話

「オーキド博士。ヒノアラシと凶鑑は新しいトレーナーに渡しました」

「ほう。そうかね」

ワカバタウンのウツギ研究所で、オーキド博士とウツギ博士がお茶をしていた。

「博士は今からコガネシティですか？」

「そうなんじゃよ。クルミ君のポケモン講座に出なくてはな」

オーキドはそう言って緑茶を飲む。

「ところで、その凶鑑とヒノアラシをその四人目に渡してよかったのかね？」

オーキドはウツギに尋ねる。

「はい。彼はゴールド君と同じ、此処ワカバで育って顔見知りです。まあゴールド君は彼の事は知らないと思いますけどね」

ウツギはそう言って苦笑した。

「まあウツギ君を信じるよ。で、もう一度聞くが、ヒノアラシは本当に野生でいたのかね？」

「はい。ワニノコの強奪事件から翌日、外の空気を吸おうと頑張っ
て腰の痛みに耐えながら外に出たら草むらにいたんですよ」

「ふむう……………」

オーキドは腕を組んで考える。

「…………やはりポケモンの生息地をもう一度調べる必要があるようじ
やな」

「そのようですね」

ワカバタウンではこのような事が話し合われていた。

キキヨウジム

「さあて、行くか」

俺はジムに入った。

「君が挑戦者か」

「ああ、まあよろしく頼むわ」

俺はピカチュウを出す。

「頼むぞポツポ」

そしてバトルが始まった。

「ピカチュウ、”でんじは”やッ!」

でんじはでポツポの動きを鈍らせる。

「そのまま”電気ショック”ッ!」

直撃を受けたポツポは倒れた。

「中々やるようだ。いけッ!」ピジョンッ!」

ハヤトがピジョンを出す。

「ピカチュウ、もう一回”でんじは”ッ!」

でんじはでピジョンの動きが鈍くなる。

「く、ピジョン”どろかけ”だッ!」

ゲ。

どろかけの効果で命中率が落ちたか……。

「ピカチュウ、”電気ショック”ッ!！」

けど外れた。

「ピジョン”どろかけ”ッ!！」

どろかけでまた命中率が下がる。

体力もあまり無いな。

「もう一回”電気ショック”ッ!！」

今度は当たって、ピジョンを倒した。

「フ、見事だった。ウィングバッジと技マシン31をあげるよ」

「おう、ありがとうな」

俺は二つを貰って、ピカチュウをポケモンセンターで回復させてからヒワダタウンに向かった。

「ちょっと此処で一息やな」

32番道路のポケモンセンターで傷ついたピカチュウ達を回復させる。

「もう二十匹くらい捕まえたな……」

又オーやウパーとかおったからな。

てかセンター前にヤドンのしっぽを売っとるオッサンがおったけど思いつきし無視したった(笑)

時刻は昼の3時か……。

「チャリで進んだら夜にはヒワダタウンに着くな」

回復したピカチュウ達を受けとって、俺はつながりの洞窟に入った。

ヒワダタウン

「着いたな。時間は7時か。まだジム戦はやれるな」

センターで回復させてヒワダジムに乗り込んだ。

「学会で留守やて？」

「そうなんだ。代わりにツクシさんの手持ちポケモンがいるからそれを全部倒したらバッチをあげる」

ジムにいたむしとり少年からの説明を聞く。

そして10分で全部を倒した。

まあ相手はトランセルやコクーンやったからな。

ピジョンとマグマラシ（ヒノアラシから進化している）でボッコボコ。

こらそこ。ズルとか言うな。

「ま、これでインセクトバッジは手に入れたしな」

そのままの勢いでウバメの森へ突入。

予想通りにスミ職人がおったから秘伝マシンのいあいぎりを手に入れた。

マグマラシにいあいぎりを覚えさせて先へ進めるルートを作って、34番道路に向かった。

「じゃあ電話番号を交換しようよ」

34番道路でたまたまバトルをしたピクニックガールのミズホに言われた。

「ああええよ。ほら、これが俺の番号や」

「ありがとうねシヨウ君」

……女の子の番号は前世でもあまりくれんかったからなあ。

何か嬉しいな。

「じゃあ何か面白いの見つけたら連絡するね」

「おう」

俺とミズホは分かれて、コガネシティに入った。

第三話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第四話（前書き）

捏造です。

リニアは試験で走っています。

そしてエリカフラグ。

アンスは分からない……。

第四話

「もう8時か……」

ピクニックガールのミズホと分かれたのはええんやけど、
のトレーナーとバトルしてたからなあ。警察官

「コガネシティは大阪やな……」

まあモチーフはそうやと思うねんけどな……。

「ん？」

ビルとビルをジャンプしている忍者を見つけた。

「……バレバレやねんけど……」

俺は思わず忍者を追い掛けた。

「父上、今日の仕事も無事終わりました……」

忍者は夜空を見る。

「父上……何処にいるのですか……」

「父上つて、キョウの事か？」

「ッ！？」

忍者が振り向くと青年がいた。

「カントー地方のセキチクシティの新ジムリーダーのアンズやな？」

俺は彼女に問い掛けた。

「……………貴様、何者だ……………」

アンズがボール型手裏剣を構える。

「俺の言葉を見捨てるのは肯定としておくわ。ところで、キョウの行方を知りたいんか？」

「ッ！？ち、父上の居場所を知っているのかッ！！」

アンズが俺の両肩に手を据えて揺らす。

「あ、あくまで憶測やから揺らすな」

「す、済まぬ」

あゝビックリした。

「まああくまで憶測なんやけど、キョウはカントー四天王のシバと一緒に修行してんねん」

「修行……ですか？」

「ああ、グリーンを倒したい一心でな」

まああながち間違っではないからな。

「……そうですか。父上は生きているのですね……」

アンズが静かに泣き出した。

「お、おい」

「す、すみません。ホツとしたらつい……。貴方は？」

「俺？俺はワカバタウンのシヨウや。今年で18歳になるな」

「シヨウさん。情報をありがとうございます」

「いやええよ。たまたま君と会っただけやしな」

「その情報は誰から頂いたんですか？」

ウゲ……。

「……風の噂でやつやな」

「はぁ……………」

とりあえずそれで納得してな。

「ですが、シヨウさん。ありがとうございました。また頑張れそうです」

「おう、しつかりな」

「セキチクに来たら是非ジム戦を……………」

「ああ、着いたら即座に行くわ」

「フフ。では」

アズは俺の言葉に笑ってコガネの中に消えていった。

「まあ、キヨウの生存情報を教えても歴史は変わらんやろ」

案外、ポケモンリーグでハヤトに勝ちそうやけどな。

「さて、センターに帰って寝てジム戦に行くか」

俺はセンターに帰った。

翌日

「あ、ラジオカード貰いに行こ」

ポケギアにいれなあかんしな。

俺はラジオ塔に向かった。

ラジオ塔

受付嬢からラジオカードを買った。

ちなみにクルミちゃんとかは特番放送のために大半のスタッフと
かと一緒にロケに行っているらしい。

ポケスペヤから多分、ゴールド関連やるな。

「……………そうですね……………」

「……………ん？」

出ようとした時、階段から何故かタمامシジムリーダーのエリカ
とヤマブキジムリーダーのナツメが降りてきた。

……………何でやねん……………。

知らんぷりしとくか……。

「……あら？その貴方はカントーのトレーナーですか？」

ギクギク（。。。；；；

「い、いや。昔にカントーに住んでたんや」

「そうですか。頭にピカチュウを乗せていたので、てっきり……」

エリカが俺に話し掛ける。

「まるでレッドとピカみたいですわ」

「はぁ……」

「……」

俺は相槌をするが、ナツメが俺を見てくる。

「あの……何か？」

「……お前はトレーナーか？」

「あ、はい。キキョウとヒワダのジムバッジを持っているけど……」

「あら、ならいつか私達のところにも来るのかしらね」

「そこまで行けたらいいですけどね」

ぶつちやけグリーンが強すぎるしな。

「…………お前は中々のあれだな…………」

「え？」

「いや、何でもない」

ナツメが何か言っただよような気がするけどなあ。

「エリカ。私はそろそろシロガネ山に戻らせてもらう。なにせ、私は療養中の身だからな」

「はい、分かりましたわ」

ナツメはそう言って消えた。

やっぱり超能力やなあれ。

「そういえばまだ貴方の名前を伺っていませんでしたわね」

「ワカバタウンのシヨウヤ。歳は18になるわ」

「あら？私と同じ年齢ですわね」

…………その歳でタمامシ大学を教えているんかい。

「なら敬語ではなくてよろしいですわ。普通に接して下さい」

「それなら遠慮なくそうさせてもらおうわ」

「はい」

俺の言葉にエリカは微笑んだ。……意外に可愛いな。

「これからジムですか？」

「ああそうやけど……」

「なら、見学させてもよろしいですか？まだタムムシ帰る時間はまだありますので」

……あれ？俺、何かエリカにフラグ立てたっけ？

第四話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第五話（前書き）

まず一言……何故こうなった？

第五話

私も見に行っていていいかと聞いた時のショウさんの表情は面白いですわね。

あらあら、自己紹介が遅くなりましたわね。

私はタمامシシティの名家の一人娘にしてジムリーダーのエリカですわ。

……何か説明というより自慢になっていますが気にしないで下さい。

ラジオの収録という事で遙々とジョウトにナツメとやってきました。

でも、ラジオ塔で中々面白い人とお会いになりました。

まるでレッドみたいですよ。

歳が同じ年だという事から話しがつい弾んでしまいましたが、ショウさんはジム戦をするらしいので私も見に行きますわ。

リニアでカントーに帰る時間はまだありますし。

「え？ジムリーダーがおらんやて？」

「そうなの。コガネラジオの特番でアカネちゃんも行っているのよ」
ジムトレーナーの大人のお姉さんが説明してくる。

「一応、ジムリーダーがいない場合は私達が相手をする事になっているんだけど……」

「ならそうさせてもらおうわ」

俺達はバトルを始めた。

「ハッハッハ。レギュラーバッジはゲットやな」

「そうですね」

俺とエリカはコガネジムを出る。

「でも、少しズルではありませんでしたか？ノーマルタイプにゴーストタイプを出すなんて……」

「そう言われてもなあ。バトルに卑怯やズルはないけどな」

俺は終始、バトルではゲンガーを出していた。

エリカはそれが気に入らんみたいやな。

「バッジを守っているなら苦手なタイプでも勝たへんとな」

「……そうすわね……」

エリカが少し落ち込んでいる表情をする。

「ちょっと着いてこいや」

「え？」

俺はエリカの手を取ってコガネ百貨店に向かった。

「ほら、食べや」

俺はソフトクリームをエリカに渡す。

「これは……」

「ん？ソフトクリームやで」

「それくらい知っていますわ。何で私に……」

「落ち込んでるより俺は一生懸命ソフトクリームを食べてる表情が好きやけどな」

…………… ちょっとキザやったな。

「…………… フフ。そうですわね」

エリカは苦笑してソフトクリームを食べはじめ。

お、俺のも溶けそうやな。食べよ。

「ん？あらあら、シヨウさん。アイスが頬に付いてますわよ」

「お、スマン」

エリカが俺の右頬に付いたアイスを取る。

…………… てか……………。

「…………… エリカもアイスが頬に付いてんで」

「えッ!?!」

エリカが驚く。

「ちょっと待てよ…………… ほら」

俺はエリカの左頬に付いたアイスを取って舐める。

「あ……………」

「ん？どないしたんや？」

エリカが顔を真っ赤にしている。

「その……………付いてたのを舐めたんで……………」

……………そういやそうやった……………今の俺の顔はスゲー真っ赤やろな……………。

「わ、悪い……………」

「い、いえ……………」

ちょっと気まずい雰囲気になりながらソフトクリームを食べる。

ピリリ、ピリリ。

その時、ポケギアが鳴った。

「あ、そろそろ時間ですわ」

「そつか。なら駅まで送るわ」

俺達はコガネ百貨店を出て、リニア駅に向かう。

「シヨウさん、僅かな時間でしたが楽しかったです」

「いんや。俺も楽しかったわ」

「タمامシに来た時は是非ジム戦を……………」

「俺、フルボッコになりそうやけどな……………」

「そうならないように祈って下さい」

「祈るんかいッ!！」

「フフ……………」

俺のツッコミにエリカが笑う。

『ヤマブキシティ行きリニア、間もなく発車しまあす』

駅員がスピーカーを使って知らせてくる。

「んじゃあな」

「はい、ではまた……………」

エリカは俺に手を振り、俺もエリカに手を振る。

「あ、そうや。これあげるわ」

俺はピカチュウのストラップをエリカに渡す。

「……ありがとうございます」

エリカが俺に微笑んだ。

……スゲー可愛いです。

プシュー。

リニアはゆっくりと出発した。

リニアはあっという間に俺の視界から消えた。

「……さて行くか……」

俺は駅を出た。

「……青春だなあ……」

駅員がボソツと呟いた。

次はエンジュシティやな。

第五話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第六話（前書き）

アカネフラグが立ったかも……何でこうなった？

第六話

『ヤマブキ〜ヤマブキ〜。お忘れ物が無いよう御注意下さい』

アナウンスの言葉と共に私はヤマブキのリニア駅に降りる。

「ふう……………」

私はポケギアに付いたピカチュウのストラップを見た。

シヨウさんに渡され、初めて男性からプレゼントされた物……………。

「見返りは私の電話番号ですけどね」

ピカチュウのストラップを貰った時、私の電話番号が書いた紙をこっそりとシヨウウさんのポケットに入れましたわ。

「フフ……………。ビックリするでしょうね」

私は思わず笑ってしまう。

「さて、タマムシに帰りましょうか」

私はヤマブキシティ駅の改札口を出ましたわ。

コガネジム

「うわああああーんッ！！負けてもうたああああーんッ！！！！」

コガネジムに大音量の泣き声が響く。

「ゴメンね。アカネがああなるとしばらく泣き止まないの」

俺の近くにいたミニスカートのアスカが説明してくる。

さて、何故レギュラーバッジを手に入れたはずなのに俺はジム戦をしている理由はただ単にアカネがジム戦をしたいとの事や。

「ウチが負けたみたいやんかッ！！」

そう言ってきたので、ジム戦になったわけや。

まあ結果的に俺が勝ったんやけど、ミルタンクはマジヤバかった。

金銀クリスタルのミルタンクのメロメロ ころがる メロメロ
ころがるのパターンでトラウマ並やからな。

てかコイツ、骨折してんのに上手く泣けるな。

「うわああああーんッ！！！！」

相変わらず泣いてる………何かイラついてきたな。

「アスカさん。すみませんがこの泣き虫、少し借りるで？」

「え？いいわよ」

案外簡単に了承が来たな。まあええや。

「ほらこいアカネ」

「な、何すんねんッ！！」

「じゃあかましいわッ！！来いったら来いやッ！！」

俺は思わず怒鳴るがええや。

アカネの泣き顔は意外と可愛いと思うな。

「ほらよ」

俺はアカネにクレープを渡す。

「………ありがとな」

「お前が泣き止まんからこうなったんやろが………」

「何やてッー!!」

「事実やるが……………」

「グ……………」

アカネは俺の言葉に言い返されなかったんか、クレープを食べべだす。

「お、意外と美味いやんこのクレープ」

「クレープ屋に謝ってこい」

俺はアカネにツツコミを入れる。

「……………あんた、意外とおもろいな」

「阿呆ぬかせや。俺は何時でもおもろいわ」

俺はピカチュウにアイスを渡す。

ピカチュウは嬉しそうにアイスを舐めている。

「……………ゴメンな。ウチが泣いたせいで、あんたに迷惑かけてもった……………」

「んなもん気にすんな。悔しかったら泣くのは普通や」

「……………ありがとな……………」

…………あれ？フラグやるか…………。

「んじゃあウチはジムに戻るわ」

「もうええんか？」

「クレープ奢って貰ったしな。あ、後一個買ってええか？」

「……………太るで」

「アカネチヨップツ！！」

「ビシッ！！」

「アダツ！？」

アカネにチヨップされてた。痛いな。

「女の子にそんな言っつなッ！！」

「女の子？男やる？」

「アカネチヨップツ！！」

「やから痛いって言ってるやるッ！！」

「あんたがいらん事言っつからやるッ！！」

「煩いな。事実やるが…………。」

「はい、クレープ」

「……ありがとう……」

俺は新しいクレープをアカネにあげた。

「今度こそジムに帰るわ」

「ああ。またジム戦しよな」

「……次は負けへんからな……」

アカネはそう言ってコガネ百貨店を後にした。

「……俺も行くか……」

俺もコガネ百貨店を出て、チャリに乗って35番道路に向かう。

「ポケギアで音楽聞きながら行くか」

俺はポケギアの音楽をつける。

「……そういや、エリカからいつの間にか電話番号貰ったな……」

ストラップのお返しやるか……。

「まあええや。登録しとこ」

俺はエリカの番号を登録してラジオをつけた。

『臨時ニュースをお送りします。繰り返します臨時ニュースをお送りします。本日正午、エンジュシティでマグニチュード8クラスの地震が発生しましたッ！！また、原因不明の大規模な地盤沈下が発生した模様です。現在、住民の避難が始まっています。くれぐれも被害区域へは近づかないようして下さい』

物語は急速に速まった。

第六話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第七話（前書き）

エンジュ震災です。

第七話

「……………此処がエンジュシティやな……………」

瓦礫の山と化しているエンジュシティを見て眩く。

チャリでエンジュシティまで来たけど、こんな荒れ具合やとチャリがパンクしそうやからピジョンに背中にあるリュックを掴んで飛行させてきた。

「ありがとなピジョン」

俺はピジョンを戻す。

「……………多分、まだ生存者はいるかもな。バタフリーツ!!」

今度はバタフリーを出す。

「バタフリー、”ねんりき”で瓦礫や木材を退けるんやツ!!」

「フリーツ!!」

バタフリーが”ねんりき”で瓦礫や木材を退かしていく。

「ん??」

瓦礫の中にシャワーズが挟まっていた。

「バタフリーツ！！シャワーズを挟んでいる瓦礫を退けるツ！！」

「フリーツ！！」

「バタフリーが”ねんりき”でシャワーズを挟んでいる瓦礫を退かせる。」

「大丈夫か？」

俺はリュックから傷薬を出してシャワーズの体力を回復させる。

体力を回復したシャワーズは尻尾を振ってくる。

「後でポケモンセンターで回復させてやるからそれまでボールの中に入っときな」

シャワーズは俺の言葉に頷いて、俺はモンスターボールを投げる。

シャワーズは一応ゲットした。

「さて、人命救助しよか」

俺達はそれから日没になるまで男性三名、女性四名、ポッポ二匹、コラッタ三匹を救助した。

臨時診療所

「救助の協力ありがとう。君のおかげだ」

「いえいえ。当然の事をしたまです」

あ、シャワーズを回復させな。

「すみません、ポケモンセンターは何処ですか？ポケモンを回復させたいので」

「ああ、ポケモンセンターならあそこだ。全壊はしているが非常電源は付いているから回復は出来るはずだ」

「ありがとうございます」

俺は礼を言ってポケモンセンターに向かった。

途中、ゴールドとシルバーが戦っていたけど無視をしてピカチュウ達のポケモンを回復させる。

チャンチャンチャチャチャーントツ！！

ゲームと同じ音かよ……。

「ま、ええや」

俺はシャワーズを出した。

「さ、これでお前の体力は回復したで。自由に生きや」

俺はそう言ったけど、シャワーズは首を左右に振って俺の膝にスリスリする。

「……俺と一緒にいきたいんか？」

俺の問い掛けにシャワーズが頷く。

……まあええか。

「んならよろしくなシャワーズ」

シャワーズは俺の言葉に嬉しそうに頷いた。

これでピカチュウ、マグマラシ、ピジョン、バタフリー、ゲンガー、シャワーズで六匹揃ったな。

ピリリ、ピリリッ！！

ん？母さんから電話やな。

「はい、もしもし？」

『あ、シヨウ？頑張ってるか？』

「ああ。今、バッジは三個や」

『そっか。アタシもハヤトに挑んで勝ったわ』

「勝てたん？」

母さん凄いな。

『当たり前よ。それで、シヨウ。あんた、バトルする時、ワカバタウンの〜とか言ってる？』

「ジムリーダー戦の時は言ってるで」

『それがなあ……今住んでるんはワカバタウンやけど、五年前はマサラタウンみたいやねん。たまたま役所に行く用事があったから役所に行って確認したら五年前の私達はマサラタウンに住んでたみたいよ』

「そっなん？」

『ええ。だからこれから自己紹介する時はどっちなにしなさいよ。まあワカバタウンでええけどね』

「どっちやねん」

思わず母さんにツッコミを入れた。

『まあ用事はそれだけよ。頑張りなさいよ』

「ああ、任しとけや」

そっ言って電話を切る。

……ふうん。マサラタウンねえ。

てことはレッドとかは俺を知っている可能性があるな。

「ま、万が一やろな」

とりあえず、今日はもう寝ようか。

俺は避難民用のテントに戻って一夜を過ごした。

それから三日間、エンジュシティに留まって被災者の支援したりして次のアサギシティを目指した。

第七話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m (m

第八話（前書き）

そろそろポケスペ組と合流します。

第八話

「……はあ、暑いなあ（；、、）」

俺はアサギシティに近い40番水道の海岸で海水浴をしていた。

たまに海岸にいるトレーナーに勝負を挑まれるけど、ピカチュウを鍛える恰好の餌食やな。

だってトレーナーはかいぱん野郎かビキニのお姉さんしかいなかった。

ビキニのお姉さんでもたまにオツパイ大きい子いたけどごっちゃんですm（——）m

「ま、母さんから頼まれたサニーゴとチョンチーは捕まえたし、後で渡しに行くか」

アサギシティに着く前日に、母さんから再び電話があつて「アサギシティに行ったらサニーゴとチョンチーを捕まえて」と頼まれたんやな。

んで二匹を捕まえたのはええんやけど、転送システムがまだ回復していないからピジョットで送るしか方法はなかった。

あ、ちなみにポケモンも進化しているのといで。

バクフーンレベル42、ピカチュウレベル45、バタフリーレベル41、ピジヨットレベル41、ゲンガーレベル43、シャワーズレベル42になっている。

ピリリッピリリッ!!

「ん?」

ポケギアが鳴っているな。

「……非通知?誰やる……」

エリカとアカネとは番号交換しているけど……。

「はい、もしもし?」

俺は電話に出た。

『おうシヨウ君かね?』

何かおっちゃんの声やな。

「確かに自分はシヨウですが?」

『そうか。ワシはオーキドじゃ』

……マジ?

「…………そのオーキド博士がただのトレーナーの自分に何かようですか？」

『いやいや。君はポケモン図鑑を持っておるじゃろ？ポケモン図鑑はワシが選んだ人間のみしか渡されない図鑑なんじゃ』

「はあ、ですが自分はウツギ博士から貰いましたけど？」

『ああ、その一機は試作なんじゃよ。一応、他の三人にも図鑑はあるんじゃが念のためとウツギ君が判断したんじゃよ』

成る程なあ。

『それで今回、君の電話したのはアサギシティで二人の図鑑所有者と会ってほしいのじゃ』

「二人の図鑑所有者ですか？」

『うむ。一人はカントーの図鑑所有者なんじゃが……ちょっと危なっかしくてのう』

イエローの事やな。

『君は二人を支えてくれまいか？』

「はあ、分かりました。アサギシティにおればいいんですね？」

『スマンのう。プロフィールとかはこっちから送るのでな』

「分かりました」

俺はオーキド博士との電話を切る。

ピリリッピリリッ……

あ、来たな。

「……やっぱりイエローとクリスタルか……」

多分、このまま行くとシルバー達にも会いそうだな。

「まあええや」

俺は海水浴を切り上げて、アサギシティに向かった。

アサギシティのポケモンセンターの前でイエローがベロリンガに襲われてるけど事なきを得たな。

あ、バタフリーで飛んだな。

「て、俺も合流しないと。ピジョット」

俺はピジョットを出して”そらをとぶ”をさせる。

二人を追い掛けると、一隻の漁船が現れた。

二人は漁船に着陸した。

「俺を忘れては困るんやけど……」

「よかったなイエロー。お目当ての彼女に会えて」

「ハイッー!!」

「イエ……ロー？」

「何だ、まだ自己紹介も済んでねえのか。ゴメンよお嬢ちゃん」

舵を握っている釣り人のヤスヒロが申し訳なさそうに言う。

「イエローってのはそう、こいつの名前。実はこう見えても一年前、カントーでの大騒動を解決したトレーナーの一人だ。知ってるだろ？ 『四天王事件』」

「よろしく」

麦藁帽子を被るイエローがクリスタルに挨拶をする。

「俺を忘れては困るんやけど……」

その時、頭上からピジョットに乗った一人の青年が降りてきた。

「あの……貴方は？」

クリスタルがおずおずと青年に聞いた。

「俺はシヨウ。ジヨウト四人目の凶鑑所有者や」

俺はクリスタルにそう答えた。

第八話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7844x/>

ポケスペの世界へ

2011年10月28日10時04分発行